

実習の成果（できたこと、得たもの等）

私が実習生として授業を行ってまず始めに気づいたことは、ひとつの授業の指導案を作成するためには多くの時間を要し、また実際に授業を行うことは想像以上の体力が必要であるということです。現場の先生方が毎日の授業に多くの労力をかけていることを知りました。指導案を考える際は、「この授業を行えば、生徒はどういう反応をするか、どういうことを考え、何を学ぶことができるのか」など想像力を働かせる必要があることを学びました。そのためには頭の中で何度も授業のシミュレーションを行うことが大切であると感じました。

また、教育の在り方として、生徒に小さい階段を一步ずつ登らせて、ふと後ろを見るととても高いところまで登ってきたことに気づく「スモールステップ方式」が大切であると教わりました。階段を上るといえるのは、知識を身に付けることの比喩です。中学校の三年間を通して、卒業時にどうなっているべきかを設定し、そこから学年ごとでの目標、学期ごとの目標、一週間ごとの目標、そしてその日の授業の目標、と細分化して考えていくことが重要であるといえます。

学級経営の面で、私はホームルームの時間を担当させて頂きました。朝は生徒たちはあまり元気がなく、静かな雰囲気がありました。私はホームルームの時間を用いて、なにか雰囲気が明るくなることを行いたいと考え、毎朝一題のなぞなぞを出題することにしました。しかし、一日目はリアクションが薄く、盛り上がらなかったため、私は自信をなくし、この取り組みをやめようと考えました。しかし、ホームルームの時間を淡々と終わらせることにもったいなさを覚え、しばらくクイズの出題を続けていると、生徒が食いつく問題の傾向が理解できるようになりました。それまで、生徒が食いつかないのは、朝一番という時間帯のせいであると考えていましたが、私がどのようなクイズを出題するのも関係していることに気づきました。新しい取り組みを始めるとき、想像通りにいかない場合は、すぐにやめてしまうのではなく、どう改善すべきかを考えることが大切であると思いました。

また、先生からのお話で一番印象に残っているのは「授業も人権教育の一環である」ということです。私は、なぜ子供たちは英語を勉強する必要があるのか、その答えを持っていませんでした。もちろん新しい言語を学ぶのは楽しいことであるし、言語を知ることによってその子の視野は格段に広がります。一方で、現代ではスマートフォンを使うことで、翻訳は可能であり、海外に興味のない生徒にはつまらない教科であるとも感じていました。そういう生徒に対して、どうアプローチをかければいいのか、ずっと迷っていました。ですが、授業は英語のみを教えるものではないと学びました。学校はもちろん勉強を行う場所ですが、本来は人格を形成する場です。それを行うのは、他でもない授業でした。私は、英語の授業には、英語での会話を通して、生徒にコミュニケーション能力を養ってもらう目的があることを

知りました。英語の授業では、他科目と違って、生徒が自由に話す時間が圧倒的に長いです。また、ビンゴやかるたなど、ゲームも頻繁に行います。ここで求められているのは、英語の習得だけではなく、友達と接してうまくコミュニケーションをとること、意思疎通を図ることです。人の間違いを笑わない、人の話をしっかりと聞く、などもコミュニケーション能力に含まれます。授業のなかで、人格形成を取り扱うという考え方は私にとってとても新鮮で、勉強になりました。

### 3. 実習のでてきた課題（できなかったこと等）

授業を行った際にできた課題は、発声と指示の出し方です。自身では大きな声を出しているつもりでいましたが、録画した自分の授業を見返して初めて、十分な声の大きさにないことが分かりました。この点に関しては、隣の教室まで声を届ける気持ちで、腹から声を出すように意識して、課題解決を図りました。また、生徒に出す指示が簡潔でなく、よく伝わらないという課題も生じました。指導教諭から、「教師の癖として、みんな話過ぎてしまう。必要最低限の言葉で端的に指示を出すことで生徒は動く」と助言を頂きました。この点に関しては、あらかじめ、どういう言葉で指示を出すか書き出しておくことによって、端的に指示を出すように努めました。また指示の出し方を学ぶために、体育の授業を見学しました。体育では生徒は散らばっていて、教師の指示に集中する環境ではありません。その中で体育の教師はどのような風に指示を出しているのかを勉強するためです。

また私は3年間塾講師をしていて、指導案を提出した際に「授業が塾っぽい」と指摘を受けました。私は普段塾で行っている「分かりやすさ」と「丁寧さ」を重視した授業を意識し、指導案を作成しました。しかし、学校という場では、「楽しく学ぶ」「重要な箇所だけをしっかりと押さえる」ということを重視していると指摘されました。最近は学校に行かなくても勉強ができる環境があり、学校に来る意味・学校にしかできない授業とは何かを考えたときに、クラスメイトと共に楽しく学ぶことだと思いました。そこで、クラスメイトと一緒に学ぶことが出来る、ペアの活動や班でのアクティビティを指導案に組み込みました。英語はコミュニケーションの科目であるため、これらの取り組みはとても大切であると感じました。

### 4. 実習を行った感想

私はこの教育実習を通して、教師という職業以前に、社会人としての勉強をすることができたと感じています。自分の役割に責任をもち、与えられた仕事に対してしっかり準備すること、目上の方々に敬意、頂いた意見にきちんと耳を傾けること、大きな声で人の目を見て、簡潔に物事を伝えることなど、働くうえでの常識や考え方を今一度見直す大切な機会となりました。

教育実習は初めてのことで、やることも多く、とても大変でした。初めて行った授業もうまくいかず、また私よりも遥かに忙しいであろう現場の先生方を見て、一週目は自分

に教師なんてとても務まらないと思いました。ですが、二週目に入り、段々と授業をすることに慣れてきました。生徒から、「分かりやすかった」「楽しかった」という感想をもらえることもあり、生徒の前で授業をすることを楽しく思えるようになりました。生徒との距離が近づくにつれて、授業中も彼らとコミュニケーションを取りながら、授業を進められるようになりました。三週目に入ると、生徒への愛着が強くなり、生徒のために分かりやすく、楽しい授業をしたいと心から思うようになりました。英語科の先生方からアドバイスを頂き、授業をつくっていく過程は、大変でしたがそれ以上にやりがいを感じました。実習を通じて、子どもたちに英語を教える楽しさを感じられたことは、大きな成果であると感じます。最終日には、生徒との別れがとても辛かったです。三週間を共にしただけでも、こんなに愛着が湧くのに、三年間も一緒に過ごしたならば、どんな気持ちになるのか、想像もつきません。きっと言葉では表せられない感情だと思います。

一週間目は、こんなに大変な仕事はきっと向いてない、と後ろ向きになっていた私でしたが、三週目にして、やはり教師になって子どもたちを育ててみたいと思いました。辛いことも大変なこともありましたが、支えてくれたのは生徒であり、また先生でした。教育実習に参加できて、色々な人に出会えたことにより、多くのことを学びました。

## 5. 今後に向けて

私は、すぐに教職につく予定はありませんが、いつかは教師になろうと考えています。今回学んだ指導案を作る上での心構えや、授業をする際に意識すべきことは、今後教壇に立つときに必ず活かしたいと思います。また、今回の実習では人前で話すときの目線や発声、コミュニケーションの取り方についても学ぶことが出来ました。これからのことは、今後どのような職についても活かしていけると 생각합니다。教育実習で学んだことを、日々の生活に取り入れて、これからも勉強に力を入れようと思います。